

平成26年度

秋田大学教育文化学部

附属学校学部共同専門委員会

実践報告書

秋田大学教育文化学部

附属学校学部共同専門委員会

目 次

平成26年度 研修会「個を伸ばす援助・支援・評価」	1
平成26年度部会活動報告	15
国語部会	
社会部会	
算数・数学部会	
理科部会	
音楽部会	
図画工作・美術部会	
体育・保健体育部会	
外国語活動・英語部会	
技術・家庭部会	
総合部会	
道徳・特別活動・進路指導部会	
生徒指導部会	
情報教育部会	
学校経営部会	
幼稚園部会	
小学校部会	
中学校部会	
特別支援学校部会	

平成26年度 研修会 「個を伸ばす援助・支援・評価」

日時：平成27年2月18日（水）15:30～17:00

場所：附属小学校鳩の子ホール

・開会のあいさつ

「開会のあいさつ」では、武田篤教育文化学部長から、現在の秋田大学教育文化学部の状況についての紹介があった。具体的には、教員採用率の向上と教職大学院の設置についてである。前者については、採用率が数年前は40%台前半で全国最下位だったのが、先生方の取り組みの結果、今年度は60%近くまで上昇し、全国平均に近づいたことについて、感謝の意が述べられた。また、後者については、コースの紹介や、実務家教員を加えたスタッフの陣容、実習の単位の増加などのカリキュラムの特徴についての説明があり、今後、一層附属校園の役割が大きくなることを踏まえての協力依頼があった。

・パネルディスカッション

最初に、司会の佐々木和貴附属中学校長からパネルディスカッションのコーディネーターの佐藤光咲先生及び4名の発表者（幼稚園 佐藤菜穂子先生：小学校 菅野宣衛先生：中学校 三浦修先生：特別支援学校 高橋基裕先生）について紹介があった。

▼佐藤：皆さん、こんにちは。コーディネーターを担当することになりました研究支援センターの佐藤と申します。よろしくお願いいたします。

最初にテーマについてご説明いたします。テーマであります「個を伸ばす援助・支援・評価」、これは学部附属共同委員会からの提案ではありますが、その趣旨を簡単にお話すれば次のようになろうかと思えます。

まず、学校教育や保育の場合において、的確な子ども理解の上に立ってその子に対し適切な援助、支援、指導を行ういわゆるPDCAサイクルの営みは評価と言われていますが、幼児教育や特別支援教育では指導や評価という用語よりも日常的に援助、支援が使われている関係で、このようなテーマになったということでもあります。

さて、これらの援助・支援・指導は的確な子ども理解が不可欠であることは論を俟ちません。しかしながら、子どもや学校が異なると、どういう形で子ども理解や援助、指導等のいわゆる評価が行なわれているかについては、お互いに知る機会がほとんどないのが実情かと思えます。

そこで幼・小・中・特別支援学校において、「個を伸ばす援助・支援・評価」の一端を紹介し合い、その長所、課題等を学び、互いの教育に活かそうというねらいを持って、このテーマを設定しました。

次にパネルの進め方について確認します。最初、幼・小・中・特別支援学校の順で、各8分程度で発表をしていただき、それを受けて、質疑応答を20分、まとめとして5分を

予定しております。時間が限られておりますが、有意義な時間となるようにしたいと思います。皆さまのご協力、よろしくお願いいたします。

それでは始めていきたいと思えます。幼稚園の佐藤先生、お願いします。

▼佐藤(菜)：附属幼稚園の佐藤です。幼稚園では子どもたちは遊びを通して様々な経験をしています。今日は私たち保育者が子どもたちの遊びの姿をどのように捉え、保育にあたっているのか。5歳児年長の遊びの姿を例としてお話したいと思います。

写真は7月の遊びの様子です。テレビで見た台風のニュースをヒントに子どもたちがニュースごっこを始めました。それぞれがテレビで見てきたことなどの経験をもとに、アナウンサー、お天気キャスター、カメラマンなどになって楽しんでます。中には原稿を書く子どももいました。保育者や他の友達にニュースを聞いてもらって、張り切っている様子の子もいます。

一人の子どもが始めた遊びでしたが、楽しげな雰囲気に誘われて、友達が集まってきました。誰もが目にしたことのあるお天気のニュースであることもイメージを共有しやすいので、子どもたちが仲間に入りやすかったのかもしれない。

こうして一つの場所に集まって楽しんで時間を過ごしていた子どもたちですが、保育者にはそれぞれがやりたいことを好きなようにやっているように見えました。どこか並行して遊びを進めているような印象です。

お天気マークを工夫して作って、役割分担をしたりと子どもたちが自分の思いで遊びを進めることができるようになっていくことをうれしく思いつつも、少し物足りなさを感じていました。

どうすればより子どもたちがより満足感を得られるような遊びとなるのか、私たちはこの遊びのエピソード記録をもとに、職員でカンファレンスを行ないました。その中で子どもの考えや工夫が互いにもっと活かされるような活動ができるとよいのでは？という意見が出されました。

そこで保育者が一緒に遊びながら、子どもたち自身が考えを出し合ったり、協力したりしていくような活動を投げかけてみることを心掛けていくことにしました。

この時のように、私たちは援助の方向性を職員間で話し合いながら、日々の保育にあたることを大切にしています。その際長期的な育ちの過程を通しつつ、目の前の子どもの姿をその過程の中に位置づけて振り返ることが必要だと考えます。そのため、遊びの姿を記録し、翌日の援助の計画を作成しています。それがこの週日案です。

たとえばこの週日案は夏休み明けの週に作成したものです。先程の7月の子どもたちの実態から保育者はこの週のねらいを『自分なりの思いを持ち、友達の考えや工夫にも目を向けながら遊びを楽しむ』と設定しました。

ねらいといっても保育者が予め設定した活動に方向づけていくということではありません。子どもたちの自発的な思いに寄り添って援助していく中で、結果として願っていたような遊びが展開されるといった、子どもたちにとって自然な流れであることも大切だと考えます。ですから援助の計画は立てるものの、実際の活動は予想を超えることの方が多いのです。

子どもたち任せにしていくというのではなく、主導的に遊びを引っ張っていくというの

でもない、ねらいを意識しながらの関わりを大切にしています。

週日案には1日を終える毎にその日の遊びの姿を記録します。遊びの中で子どもたちがどんな思いでいるのか、またどんな経験をしているのか、と考えます。そして翌日に向けて保育の計画を書いています。どんな活動になっていきそうか予測したり、こんなふう展開するといいなと願いをもったりしながら、具体的な援助の方法について考えています。そうして1週間を終えるとその週の保育の振り返りを行ないます。1週間という長さで子どもたちの育ちを見つめ直し、翌週の保育に繋げていっています。

この週日案と共に毎週作成しているものが“個への援助”というものです。ここには一人一人の子どもの前週の遊びの姿や経験していること、課題となること、援助の方向性などを記入しています。同じ遊びをしても、幼児の興味や関心、友達との関わり方などは一人一人違いますので、保育者の関わり方もそれぞれに合わせて考えています。これ(写真)が1クラス分ということになります。

写真は10月の子どもたちの遊びの様子です。影絵遊びをしたことのある子どもたちがもう一度やってみたいとあって、スクリーンや紙人形を作り始めました。以前より登場人物が多い絵本を題材にしたことや仲間に入りたい子どもが多くなってスクリーンの中に入り切れなくなったことなどから、保育者はその物語を劇としてやってみてはどうかと提案しました。表現したいという子どもたちの思いと、新たな活動に期待を持つことで意欲を高めて欲しいという保育者の願い。それを重ね合わせてみての援助でした。

子どもたちは初めてのことにワクワクした様子で活動を始めました。水槽は絵で描いたらどうか、竜宮城に貝を貼ったらどうか、こんなダンスをしてみたいと考えを出し合い、自分たちで必要なものを作ったり、練習したりしながら劇作りを進めていく姿が見られました。

共通の目的ができたことで、子どもたちは相手の考えや工夫にも興味を持ち、受け入れたり、反対に受け入れられずに揉めたりしながら遊んでいました。考えが合わない時でも劇を完成させたいという目的があるため、折り合いを付けていく姿も見られました。7月の頃の遊びと友達との遊びの進め方が変わってきていることを感じました。

こうして7月と10月の遊びの姿を後になって振り返ってみると、遊びの進め方や友達との関わり方において、子どもたちの変容をとらえることができました。

幼児期の子どもたちの育ちというのは、1日1週間という単位ではなかなか実感できるものではありません。すぐに実感できるものではなくても、一人一人の子どもたちの実際の姿を丁寧にとらえ、週日案や個への援助を作成し、充実した遊びの中で子どもたちが育っていくことを願って、日々の保育に取り組んでいるところです。

以上、5歳児の遊びの姿の変容と週日案の紹介でした。

▼佐藤：ありがとうございます。それでは小学校の菅野先生、お願いします。

▼菅野：附属小学校の菅野です。今日はよろしく願いいたします。

私たち附属小学校では「新たな価値を創造する『対話』」を目指した授業作りに今取り組んでいるところです。感じたり、考えたり、思い浮かべたりしたことを形にしていくためにはどうしても言葉の力が必要になります。そのような創造的な作業に用いることのできる言葉をどのようにして増やしていくことができるのかということを考えながら今実践に

取り組んでいるところです。

つまり子どもたちが理解したり、表現したりするために必要な言葉をどうすれば増やしていくことができるのかという問題です。

そこで今回は私が体験している2年生の国語、様子を表す言葉という学習でこんな実践に取り組んでみました。3分間対象を言葉だけで説明するというもので、グループ毎に一つ一つ物を、実物を渡して、それについて短文で説明するというものです。

例えば、こちらにあるたまねぎをグループの机の真ん中に置いて、そこで実際にこれを表してもらおう。先生方でしたら、このたまねぎをどのように表わすでしょうか。

子どもたちは「色が茶色だな」とか、「先の方がちょっとふさふさしているなあ」なんていう短文を、書いていきました。

子どもたちはその直前に図工でクロッキーをやっていたので、「まるでクロッキーみたいだね」という言葉がでてきました。それでこの活動を“言葉でクロッキー”と名づけて取り組んでいきました。

実際の活動に取り組んだ子どもたちからは、「あれ、なんて書けばいいのかな」「見えているんだけど、言い方がわかりません」というようなつぶやきがたくさん出てきました。

1回目の“言葉でクロッキー”を行う中で子どもたちは自分が発見したこと、見ていることを言葉にする難しさを感じていました。

その結果、1回目の言葉でクロッキーで、子どもたちが作った短文の数は平均すると3.8文でした。一番少ない子は1文、一番多い子でも5文といった状態でした。

その後、4時間の単元の終末、同じ対象で2回目の言葉でクロッキーを行ってみました。2回目の結果は平均10文に増えていました。

この「3.8→10.0」の矢印の部分に注目して下さい。1回目のクロッキーから2回目のクロッキーの間に子どもたちの間にどのような学習が生じていたのか、ということをお話していきたいと思います。

まず先程申し上げましたとおり、子どもたちが一番最初に感じたのは目の前で見ていたたまねぎとか、いよかんみたいなものをどうやって言葉で表せばいいのかなという、言葉にできない難しさでした。それがそのまま学習課題となって、じゃあもっと様子を表す言葉を集めよう、ということになりました。

そこで「ざあざあ」とかの擬態語、それから滝のようななどの比喩、それから白い、長いなどの形容詞という3種類の様子を表す言葉があるんだよということを説明した上で、2種類の言葉集めの活動に取り組みました。

まず始めに、子どもたちがよく読んでいる物語やお話などの本の中から様子を表す言葉を見つけて、集める活動を1時間行いました。そして、その次の時間は実際に実物を見ながら、友達はどうやって言葉で表すのかなというふうに友達が対象を表した文章を実物を見たり、触ったりしながら交流し合うという活動を取り入れました。

ここで先生方にお考えいただきたいのですが、2回目の言葉でクロッキーをやった時、子どもたちは本で集めた言葉、それから友達との交流から集めた言葉、どちらを多く使っていたと思われますか？

では本から集めた言葉の方が多かったと思われる方はグーを、友達から集めた言葉の方が多かったと思われる方はパーを提示いただきたいと思います。(3秒後に) はい、ありが

とうございます。

実は実践したところ圧倒的に多かったのは友達から集めた言葉の方でした。本から集めた言葉を用いている子どもはクラスの中でもごく一部の子だけでした。その中から、特徴的な子どもを今日は3人ご紹介したいと思います。

初めの一人目はMさんです。Mさんは1回目のクロッキーの時は1文、2回目の時は11文と非常に増えたお子さんです。その内、友達と交流した中から得た言葉、語彙を使って表しているものは11文中9文ありました。単純に量的な変化が見られたのがMさんの場合でした。Mさんは友達との交流からこういった語彙を増やしていったんだなということが見てとれました。

それに対して、KY君の場合は4文から6文とわずか2文増えたのみでした。しかもグループの友達から得た表現、言葉というのは残念ながら0個でした。ではKY君はこういう自体、対話したこと自体に意味がなかったのかというふうに考えられますが、実は彼の中でも変容が見られました。

それはKY君は最初1回目の言葉でクロッキーをした時は形と色についてしか書かれていませんでした。しかし2回目のクロッキーでは、すべすべしているとかっていう手触り、それからちょっと暖かいという温度、ぎこぎこしている音といったグループの他の友達が使っていた視点を用いて文章を書くようになっていました。つまり彼の場合は、友達から言葉そのものではなくて、物の見方、視点を学んだというふうに考えられます。

そして最後の3人目はR君です。R君の場合はもともと国語が非常に得意な子なので、1回目でも5文、しかも多様な視点から書かれていました。2回目は14文と増えていますが、この子も友達から得た語彙はわずか4文、およそ3割程度でした。

ではこのR君の場合は、対話によってどのような変容が生じていたのかというのを見てもみますと、彼の中にも1つだけ変容したことがありました。それは始めは丸いとか赤いという、形容詞でしか表現できていなかったのですが、2回目の言葉でクロッキーの時は富士山みたい、栗みたいなどの比喩、それからぼこぼこ、ごつごつといった擬態語を使って表現することができるようになっていました。

1回目は1種類だった表現の種類が、2回目は3種類の表し方で表せるようになっていました。しかもかなり比喩の方が気に入ったようで、すだちみたいなど、他のものに例える表現を9文ほど使っていて、友達の仲との交流を通して、何かに見立てる、そういう表現方法を学んでいたというふうに考えられます。

このように同じ学習活動をしたメンバーであっても、言葉の力の変容は非常に多様な形で表れるということがわかりました。指導要領総則の解説の中に、「他者との比較ではなく、一人ひとりの良い点、可能性、進歩の様子を見取ることが大切」だという一説があります。平均した数字で3.8から10.0という単純な数字に表れてしまっていますが、実はこの間の矢印の部分には今ご覧いただいた通り、子どもたちの非常に多様な変化が含まれているということが今回の実践からわかりました。

だとすれば、私たち自身もそうした一人ひとりの多様な変化を見取る、多様な評価の視点が必要であるというふうに考えられます。一人ひとりの子どもたちの「何が」「どのように」変化したのか、それを見取ることができるように今後も研究実践を進めていきたいと考えています。発表は以上です。ありがとうございました。

▼佐藤：ありがとうございました。次は中学校、三浦先生、お願いします。

▼三浦：中学校からは1年生に所属しております、G君の事例を紹介します。

G君は平成22年に行った知能検査で軽度の知的障害と診断されております。入学後間もない頃の様子を学習、生活行動、そして部活動の面からお話します。

まず学習面では自分の興味があることについての話はできますが、自分の考えを文章に上手に書くことができません。文字の区別がつかなくなったり、文字が欠けていたりします。また小学校低学年程度の漢字でも読めないものがあります。また自分で書いた文字や文章を読むことも苦手でした。授業中は姿勢が悪く、椅子を後ろに下げて、体を前に倒し、そのまま寝てしまうこともありました。体育など体を動かすことなど、自分の興味のあることに対してはがんばろうとしますがそれ以外のことに対しては無気力気味でした。

次に生活行動です。物の整理整頓が苦手な中やロッカー、プリント類の整理が上手にできず、自分でどこにやったのかわからない状況でした。また靴ひもがほどけていたり、Yシャツが出ていたりしていても気にしません。自分で判断して行動することも苦手なで、周囲の子どもたちから面倒を見てもらっています。

対人関係では特別仲の良い友達はおりませんが、休み時間になると甘えたような声を出して、関わろうといたします。友達と大きなトラブルになるようなことは今までありませんでした。

最後に部活動です。G君はソフトテニス部に所属しております。学習面と生活行動面の問題と同様な場面が見られました。その中で部活動の担当者が苦慮したのが一部の部員への対応です。部活中のG君の言動が他の部員の士気を低下させ、そしてそれが部活内の問題行動の一因となっていると考えている部員もありました。

これらの課題を次のような手立てで改善を図ってきました。

学級では教育系補佐員が副担任として配置され、担任と共同で指導に当たりました。そしてG君と話し合いを行ない、G君そして保護者も納得する学習面、生活行動面での具体目標を設定しました。

学習面では丁寧な文字を書くことを目標とし、日付や目あて、黒板の赤文字で書かれている所などを全部を書かなくても大事な所を記入するような声掛けをしていきました。その結果、以前は何かを書く際、ノートや鉛筆の先を一切見ないでただ書いておりましたが、最近は自筆している部分を見て、字を書くようになりました。

生活行動面では、自分で判断して行動することを目標としてただ支持されたことをするのではなく、自分で考えて行動できるような機会を意図的に設定して、指導しました。現在もなかなか自己判断、自己決定できているとは言えませんが、体育の授業の中では他の生徒に振付を教えたりする様子も見られています。

そして部活動です。まず単調な練習にならないように担当者がメニューを工夫しました。ただ辛くなってくるとトイレや水汲みなどを理由に練習場所を離れることもありますが、以前よりも随分と我慢強くなってきました。また活動終了後に活動場所を必ず見届けることにより、忘れ物も減少してまいりました。ソフトテニスでは必ずペアになりますが、こまめに交代を取り入れることでG君はもちろん他の部員のも負担が減るように努めており

ます。

最後になりますが、G君の成長、変容ということで、先程のスライドで連絡ノートの変化をご紹介します。左のノートが入学して間もない4月15日のものです。教科の連絡も空欄で記入されておりません。一番下の欄が保護者からの返信なんです。毎日欠かさず記入してきました。そして右のノートが今年1月30日のものです。丁寧と言える状態ではありませんが、空欄がなくなってきました。また2学期以降、一言感想を設けました。この部分ですね。保護者からはここを見るのが楽しみになったと記載されております。

今年一年間の指導で劇的にG君が成長したとは言えませんが、G君は中学校での生活を嫌がることなく、無欠席で過ごしてきました。今後も中学校全体のチームとして指導にあたっていきたいと考えております。

以上で、簡単ですが発表を終わります。ありがとうございました。

▼佐藤：ありがとうございました。続いて特別支援学校の高橋先生、お願いします。

▼高橋：附属特別支援学校の高橋です。よろしくお願いします。

本日のテーマの「個の援助・支援・評価」は「個々の特性や実態を把握し、教育活動を展開していく」という特別支援教育の原点であり、今回はその具体的なアプローチとして集団活動への参加に消極的な生徒への支援について発表させていただきます。

事例の発表の前に今回のテーマ、「個への支援」のベースになっている本校の研究について簡単に説明します。本校の教育目標はここに掲げた通り、「児童生徒のもっている可能性を追求し、一人一人の能力・特性などに応じた知識・技能・態度を身に付けると共に可能な限り積極的に社会参加できる人間を育成する」となっており、ここでも個に対する支援の重要性が謳われています。

今年度はこれまでの研究、児童生徒の実態、社会要請等から研究テーマを「ひと・地域・未来をつなぐ授業づくり」として研究を進めています。

研究の方法は次の3点です。ここでは(2)(3)についてご覧ください。求められる能力観とは、「変化する状況、(いろいろな人や地域との関わり)の中で情報を整理し、自分のもてる力を発揮して、自らの役割を果たすことができるような能力」のことで、そのことを念頭に置いた授業づくりを行なっています。評価に関しては(2)についてのエピソード記録の蓄積をもとにしたカンファレンスを行い、児童生徒の変容を追っています。

以上のように、本日のテーマである「個の支援」に結びつく授業づくりを実践しているところです。

本校の児童生徒の個々の卒業後の目指す将来像に迫るために、授業づくりを分かりやすく示したのがこの図になります。特別支援教育の原点である「個に対する様々な支援」をもとに日々の教育活動を展開しています。以上のことを念頭に本事例を聞いていただければと思います。

本日の事例対象生徒であるA子の実態ですが、A子は小学校通常学級から入学した中学部1年生の女子生徒です。後ろ右端の女の子です。本生徒は、入学当初は初めての場や集団での活動への参加が難しいことが多く、教師や友達が迎えに行ったりするなど、教室に入るのに時間を要していました。

また見通しが持てないことや突発的なことへの対応が難しく、泣き出したり、何も言えなくなってしまうことがあります。保護者の話では、いつも友達の陰にいて、小学校でも自分の気持ちを伝えたり、笑顔を見せたりすることが少なかったということでした。

これは小学校での負の経験や様々な経験の不足、自分の行動に自信がもてないことなどに起因していることが考えられ、これまでと環境が変化した中学部入学時の支援が非常に重要であると捉えました。写真は秋田朝日放送に見学に行った時の写真で、この時もなかなか写真に写るのを拒否して、やっと撮った一枚の写真です。

主な手立ては次の3点でした。1点目は本生徒との信頼関係の構築、話し合いの積み重ねです。入学当初から授業開始時間になると廊下に行くなど退室する様子が見られましたが、決して無理強いすることなく、「どうして入りたくないのか」と聞いたり、「Aさんならできるよ」「〇〇の活動が終わったら入ろうか」などと言葉をかけたりして本生徒の信頼関係を構築し、気持ちを把握することに重点を置きました。

また、本生徒が納得するまで時間をかけて話し合いをし、「自分で決める」という過程を大事にしました。この話し合いでは徐々に「やってみる」という気持ちを高めていくような言葉がけを心がけ、本生徒の活動をステップアップしていくようにしました。

2点目は成功経験の蓄積です。本学級では、取材したことを発表するテレビ局を題材にした単元を設定しています。役割分担の際にA子さんをみんなの前で話さなければいけないアナウンサーの役割にしました。人前で話すのは苦手ですが、「暗記が得意」という長所を活かして、安心して活動できる場面を設定しました。また苦手な発表場面にも安心して臨めるようにA子が信頼できる生徒をペアのアナウンサー、右側の男の子ですが、にしました。本番では写真のようにみんなの前で身振り手振りを交えて、大きな声で進行を進めることができました。

3点目は集団参加や発表活動などが難しい場面での教師側の対応の共通理解です。関わりや心の動きを記載したエピソード記録を活用したカンファレンスを定期的を実施しました。A子の行動や気持ちの変化に関する考察を学部職員全員で行ない、A子に対する対応や今後の取り組みについて共通理解し、A子に接するように心がけました。

最後に変容に関しては、次の3点が上げられます。このような変容の背景には、成功経験の積み重ねによって「やればできる自分に気づき始めてきたこと」、学校を「自分の気持ちを伝えてもいいんだ」という、安心できる場所であると認識し、「自分の気持ちを伝えることの大切さ」についても気づき始めてきたことが考えられます。

今後の課題としては、今は学級担任や学級の友達との活動が中心であることから、関わりを広げていくことが上げられると思います。また更なる経験の積み重ねを行い、様々な場面で自分の力を発揮できるような取り組みも必要であると考えます。

今年度はある程度関わり方を共通理解してみんながA子に接しましたが、「様々な人の様々な接し方」に対応できるようになっていくことが重要であると考えます。

特別支援学校の支援について終わります。ありがとうございました。

▼佐藤：それでは質疑・応答に入りますが、なお時間がかなり遅く始まりまして、押ししておりますので、フロアからの質問等は1つか、2つに限らせていただいて、主として私の

方から質問するという形にさせていただければと思いますが、ご協力願います。

それでは、ご意見、ご感想がある方おりましたら、フロアからお願いします。ないよう
ですので、後程またお願いすることにして、私の方から質問に入らせていただきます。

初めに幼稚園の佐藤菜穂子先生、3点お願いします。1点目は週日案を活用してのカン
ファレンスで、子どもの援助計画を立てるわけですが、その際どういう子どもが援助の対
象となるのか事例を1, 2紹介してもらいたい。

2点目は気持ちを外に出さない子どもや言葉でうまく自己表現できない子どももいると
思います。保育者としてそのような子ども理解はどのようにされているのか。

3点目は、幼児の成長、変容のスピードがとても速いと思いますが、発表で紹介されま
した5歳児の子どもたちの姿は現在どのようであるのか、簡潔に教えていただければと思
っております。3点、よろしくお願いします。

▼佐藤(菜)：では1点目の週日案について。週日案の“個への援助”についてお話したい
と思います。“個への援助”は、何人かを取り上げて、というよりはクラス全員の子もた
ちの分を考えています。ただその中で、子どもたちがあちこちで遊んでいるので、この例
えば前の週に関わってくる中でこの子に重点的に関わっていこうとか、そういうようなこ
とがあります。

例えばどういう文章を書いているかということなんですけれども、先程劇作りをしてい
た子どもたちの紹介をしましたが、例えばその劇作りが始まる前にそこに参加していたあ
る女の子については、私は次のように書いていました。

『A子、B子と3人で家を作って遊んでいる。一緒に居ることで安心している様子であ
る。遊びの中で共通の目的が出てくるよう提案してみる』です。

気の合う友達がいて、とても楽しく過ごしているんだけど、何か新しい目的が出た
らいいかなというふうなことを感じていました。

それから別の男の子ですね、写真では紙人形を持って遊んでいた子どもですけれども、
その子には『少しずつ関わる友達が増えてきている。関わる友達が増えた中で、どのよ
うに自分の思いを表しているのか見守り、一緒に遊びを進めていく楽しさを感じたり、自信
を持ったりできるような声をかけていきたい』というふうに思っていました。

それぞれの子どもにそれぞれ思っていたことがあったのですけれども、週のねらい、そ
の女の子や男の子の実態をもとに、週のねらいを「いろいろな友達と考えや工夫を出し合
いながら遊ぶ楽しさを味わう」と設定しました。そして出てきた紙人形劇というところに
劇をやってみてはどうかということを誘ってみたりする中で、それぞれその女の子も男の
子も劇作りに参加して、この後2週間ぐらい、劇作りに取り組んでいったという形になり
ました。

それから2点目のその気持ちを表す、言葉での表現というところなんですけれども、幼
児なので言葉以外での表現の方が多くくらいだと思います。私たちは子どもたちの視線の
先を追ってみたりとか、戸惑っている様子、ちょっと笑っている様子というか、そういう
表情からとか、または今日はちょっと甘えん坊だなとか、仲間に入りづらいのかなという
ような行動や雰囲気から察したりすることがあります。

気をつけているのは、子どもたちの発する言葉は必ずしも言葉通りとは限らないという

ところです。例えば「劇やってみる？」って誘ってみて、「やだ、やらない」と言っているけど、興味がありそうだなということとか、不安なのかとか、周囲の状況とか、前後の姿などからいろいろ考えられるということに気がつけています。

そう思って子どもたちのことを理解しようとするんですけども、完全に理解することはできません。それでも子どもの思いにできるだけ寄り添って、そういう保育をしていきたいと考えています。そのために先程のように事例を取り上げて、その時の子どもたちがどんな思いでいるんだろうということをいろんな保育者から考えをもらおうというか、考えを相談し合うことで、子どもを見る視点、保育者としての幅を広げて、子どもたちの姿をとらえられるようにするためにインファレンスを続けています。

現在のというか、これは1月の子どもたちなんですけれども、ドミノを並べて遊んでいる内にテレビのピタゴラススイッチみたいな仕掛けを作りたいっていうふう考えた子どもたちです。ドミノのセットの他に積み木の板、ラップの芯、プリンカップ、たこ糸などを使ってコースを作ろうとしています。途中で何度もドミノが倒れてしまったり、イメージしている動きに装置が動かなかったりするんですが、保育者に頼ることなく子どもたち同士で「こうしたらどう？」「これでもおもしろいんじゃない？」と没頭して作り続けていました。

結局この日子どもたちは登園してから片付け始めるまで約2時間、この組み立てに熱中していました。12月頃から子どもたちは友達同士で考えを出し合いながら遊びを進めていくようになってきています。共通の目的に向かって見通しを持ったり、役割分担や協力をしたりということも自分たち自身の力でやれるようになりつつあるところです。

こんなふうに子どもたち同士力を合わせたり、工夫しあったりということ、そういう姿に成長を感じているところです。こうして主体的に遊びに取り組む中で、目的や見通しを持ち、あきらめないで取り組むようになってきたということがこれから小学校に入学して、課題がいろいろあると思うんですけども、そういう学習課題を自分自身のものとして、取り組んでいこうとする力の基礎になって欲しいなということを願っているところです。今の子どもたちの様子でした。

▼佐藤：ありがとうございました。たまに幼稚園に行く機会がある訳ですが、先生方が子どもたちと一緒に遊んでいるということはよくわかるんですが、何を教えているんだろうということがあまり見えなかったことがたくさんありました。しかし、今日の発表で保育者の方々が、実によく観察してきめ細かく記述しながら、子ども理解そして援助に結び付けていくというふうなことがわかりました。ありがとうございました。

それでは小学校菅野宣衛先生に移りたいと思います。最初に、子どもたちがたまねぎなどの対象を見て、それを言葉で表現するという学習活動の際に、“言葉のクロッキー”みたいだと表現した子どもがいましたが、とても子どもたちの感性や言語力、表現力が豊かだなということを感じました。

それでは大きく2点質問をします。1点目は先程マトリックスを使いましたが、おそらく何か意図があると思うんですが、このことから子どもの学習についてどんなことがわかるのか、お願いしたいと思います。2点目は1回目から2回目の学習活動に移る際、あるいは2回目の学習の過程でどのような支援を行ったのか。特に大幅に言葉が増加した

MさんやRさんへの支援はどうであったか。また逆に言葉がなかなか見つからないなどつまづきのある子どもへの支援はどういうふうに行ったのか教えていただきたいと思います。よろしくお願いします。

▼菅野：それでは只今ご質問いただきました点についてご説明申し上げたいと思います。

まず最初に数字だけの表をお見せしましたが、一番大事だと思っているのは、1回目の左側の数字の意味です。1文しか書けない子、4文書ける子、5文書ける、数字にしてしまえばただ1文字ですが、それがなぜ1文なのか、なぜ5文書けるのか、それぞれの子どもたちが今現在持っている言葉の力で書いた文章ですので、そこに同時に課題も含まれていると考えています。

課題を分析する時に私がいつも用いているのが、同じ附属小学校の生活科で実践されている鈴木先生の振り返りの3つの視点です。子どもたちの現状を3つの視点からいつも分析されているというお話を伺って、それを参考にしています。

1つ目はそもそも何すればいいかわからない。2つ目はやりたいことは決まっているんだけど、どうすればいいかわからない。3つ目はある程度できるけれども、もっと良くしたいという3種類のタイプの子が内在しているということを感じて、その視点から分析しています。

その視点から、1回目の言葉でクロッキーの際の子どもたちの実態を見ると、そもそも何を見ればいいかわからないという視点が分からない子、見えているんだけど、どういう言葉にすればいいかわからないという子、それから一応書けるんだけど、もっと伝わるように書きたいという子がいました。

それぞれの実態をまず把握するというのがその後の授業とか、単元にどういう活動を組み込んでいけばいいのかを考えていく起点になります。どうすれば一人で1文しか書けなかった子がみんなと一緒にやることでその限界を突破して、より豊かな表現を見つかることができるのかということを考えて支援の方を組み立てていきました。

1回目と2回目の間にある支援は、その実態を踏まえて行いました。先日は本校の校内研で進藤先生が図工の授業を提示してくださいました。その時に、羽が作れないとか、足を立てたいという共通の課題を持っている子同士で解決したり、解決法をもっている子が対話に参加して、こうすればいいよと教えてあげたりする場面がありました。それと同じ考え方を国語にも転用できないかと思い、視点が分からない子の場合には比較的多様な視点を持って書けている子とグルーピングしました。語彙が少ない子の場合は語彙が豊かな子とグルーピングするようにして、対話で交流した時にそれぞれ足りないものが補えるような4人構成のメンバーに組み替えました。その上で実際に体験したり、見たりというような活動を行うようにしてみました。

それぞれの対話の効果どのように表れるのかというのは実際やってみないと分からないところなのですが、私がすごく個人的に意味があると思ったのはKY君です。彼は4文から6文にわずか2文にしか増えていないのですが、その内訳をみると2回目の6文と1回目と同じ対象を書いたのですが、重複している文章は一つもないんです。全く新しい文を6つ書いているのです。しかも彼の場合は視点そのものが増えているので、先程の指導要領の解説で言う、良い点や可能性、進歩の様子の3つから考えると、伸びる可能性が一

番高いのはK Y君だろうなと思いました。書いた文章の数は6文と少ないものですが、ですが視点を得たことでこれからより良い表現をしていける可能性は非常に高まったのではないかなと思います。実際その後別な場面で書いた文章では視点が増えて、いろんな面から物事を捉えられるというような側面も見えてきましたので、そういう面ではすごく成長が見られたのではないかなというふうに感じています。以上です。

▼佐藤：ありがとうございました。マトリックスに表すことによって子どもの学びの特性とかこだわりとか、そういうふうなものが把握できるのではないかと私も感じました。

また授業中における、あるいは学習の次から次への橋渡しの時の子どもへの一人一人に応じた支援のあり方というふうなものも大変参考になりました。ありがとうございました。

中学校と特別支援の方には、時間の関係でそれぞれ3分程度でお答え願ってよろしいでしょうか。どうかよろしくお願いします。

三浦先生、3点お願いします。1点目は、生活改善の目標は子どもと担任、学校が共通理解し、共有することがとても重要だと考える訳ですが、具体目標を合意するにあたり、担任や学校はどのように取り組んできたのか、その経過を簡単に教えていただければと思います。また保護者にはどのタイミングでどのように伝え、了解してもらったかも含めてお願いします。

2点目は9月と1月の連絡ノートと比較して、学校から家庭への文章量は変化があまりなかったのですが、家庭から学校に対してはだんだん減ってきて、半減しているようにも見えます。これをどう捉えるかと、この辺の所を教えてもらえればと思います。

もし時間に余裕がありましたら、小学校との情報交換とか連携はどのようにされていたか、3点よろしくお願いします。

▼三浦：では最初の具体目標に関するところですが、入学して、そしてじっくり1年部、G君について観察を行なったと。その中で1年生として生活する上で何がこの子にとって大事なのかというのを十分話し合い、吟味した結果、丁寧に文字を書く、自分で書いているという自覚のもとに。あともう一つは自分で考えることですね、そういうことをしっかりしていったらいいだろうと。それを夏休みに入って三者面談ある訳ですが、学級担任が母親にこういう指導をしていきたいというふうに話して、継続しているというふうなことです。

2点目ですけれども、ノートは確かに量は減ってきています。入学段階は母親の方からはこういう指導をしてほしい、具体的にこういう面を見て欲しいということが細かく書かれておりました。それがだいぶ減ってきてまして、G君の学校生活でがんばっていることなんかを紹介すると、それに対する感想などを述べてくるというふうな形になった。量もなんでしょうけども、実際のところ内容も変わってきております。ただしノートだけでなく、電話連絡なんかでも定期的に継続的に学級担任行なっておりますので、そういったところもおそらく信頼を強める契機になっているのではないかなと考えております。

最後の小中の連携に関しては、もう入学時に小学校から細かい連絡を受けております。入学した後は逆に言えば小学校に何か情報を提供してもらうような大きなトラブルは起きていないと。G君は今も非常に明るく元気に生活しておりますので、それに多くの情報を

求める必要がないという状況です。以上です。

▼佐藤：簡潔に説明していただきありがとうございました。ともすれば担任一人で背負いこむというふうなことになりやすい面もある訳ですが、担任を中心として学年とか、学校全体での取り組みが成果を上げてきているなどということがわかりました。ありがとうございました。

それでは高橋先生、3点お願いします。1点目はA子についてのエピソード記録を活用したカンファレンスを行なった際、どんなエピソードに対してどんな話し合いがなされたのか、教えてください。2点目はA子が変わったきっかけは何か。どのような支援が、指導がきっかけか。3点目はA子の変容に対して保護者の反応はどうであったか。また家庭での生活の変化などはどうであったかを教えてください。よろしくお願いします。

▼高橋：簡単にお話しします。エピソードするとちょっと時間がないので省略させていただきます。カンファレンスでは、「教室に入ることはできたんですが、なかなか人前で発表できない」という話題から「見通しをもつこととか、できるという自信、それから認められることが重要である」という話し合いの結果ができました。一方で臨機応変な対応も期待できるということで、カンファレンスは「関わりを広げていくための手立て」など長期的な視点を視野に入れながら、そこをポイントに置いているところです。

きっかけですが、5月までは毎朝、朝の学習に入れなくてずっと友達や教師が迎えに行っていたんですが、「学校は楽しい」だとか、「レポートがとれたかな」といった時にあえて迎えに行かずに、マンツーマンで話し合いをする機会を設定しました。「A子さんはできるよ」というふうに伝えて、「私はできるかな」みたいな話だったんですが、「できる、必ずできる」ということで約束をして、その日からは毎日授業に入れるようになりました。生徒と向き合う、気持ちを伝えるタイミングがすごく大切なポイントになるのかなと個人的には思います。

保護者の反応ですが、「小学校の時はほとんど学校のことはしゃべらなかったんですが、家庭でも学校のことを話すようになって、笑顔が多くなった」と話していました。保護者がうれしいという気持ちでなったこと、子どもが変わったことで協力体制がより強固になっていっているなど感じているところです。以上です。

▼佐藤：ありがとうございました。特別支援では一人一人の子どもを大事にしながら、常にチームを組んで課題の解決にあたってきていることを改めて教えられました。ありがとうございました。

時間がなくなってきたわけですが、まとめに入る前にフロアの方、是非一言という方、おりませんでしょうか。

▼附属小学校の高橋です。4人のパネラーに先生方ではないんですけど、この会が附属学校・学部共同委員会だということと、どうも今話を聞いていると学部長先生の挨拶にもあった、学生の援助・支援とも関係が深いなと思って聞いていました。

実際、教育実習ではなくてモチベーションを高める実習なんだという変化をずっと感じ

てきていますが、大学の中では援助・支援が必要だと思われる学生にどのようなチームであたっているのかということが、私たちはわからないまま仕事している部分があるような気がします。

もし可能なのであれば、大学の中で支援・援助が必要な学生の方に、どのようなチームでサポートをしているのか、私たちは実習の現場でサポートしています。大学の中ではどうなっているのかということをお教え下さい。

▼佐藤：詳細にはお答えできる時間はありませんが、大学ではそれなりにしっかりとしたチームを組んでやっておりますので、紹介する機会があれば来年度にも早目にお伝えしたいと思います。よろしくお祈りします。貴重なご意見、ありがとうございました。

それでは時間もありませんので、私の方から感想を3点述べてまとめて代えさせていただきます。

端折って要点だけを述べます。1点目は、評価の方法はさまざまあるなというふうなことを感じました。とりわけ幼稚園や小学校、特別支援学校ではエピソードを記述していくという方法をとっておりました。そこでは子どもと実践者との間でどのような心の動きがあったのかというふうなことが丁寧に綴られて、それがカンファレンスの材料にもなっていることで、保育や教育の評価として非常に有効だと感じました。

あまり小・中学校では馴染みのないエピソード記述という方法ですが、小・中学校でも取り組んでみる価値があると感じた次第であります。

2点目は、保育や教育の場においては、事前に指導計画、評価計画を立てますが、実際の場面では「授業の場面では働きかけながら観察して、実践を通して理解する」ことが非常に大きな役割を果たすものだなと思いました。働きかけながら子どもを理解し、指導の微調整を行ったり、新たな手立てを講じたりすることは、いわば形成的な評価と言われるものだと思いますが、保育や教育の様々な場面において個を伸ばすための大きな役割を果たしているとそういうふうに感じました。

3点目は、指導者がチームとして働きかけを行なうということが発表にもありましたけれども、子どもを理解する上でも個を伸ばす上でも、チームであることが非常に効果が大きいと思います。そういうことを感じました。

以上であります。限られた時間の中でテーマについて深く掘り下げることはできませんでしたが、4校園の相互の子ども理解と援助・支援・評価について貴重な情報交換ができたのではないかなと思っています。

なお、4校園は学年末の多忙な時でもありまして、特に中学校は2週間後高校入試、卒業式を控えておりまして、大変だったのではないかなと思っています。ありがとうございました。

最後に学部附属共同委員会、4校園、そして関係各位にお礼を申し上げて、パネルディスカッションを終わらせていただきます。ありがとうございました。

・パネルディスカッションの後、5時10分を目安に各部会の話し合いの時間が持たれた。

2014年度部会活動報告書

部会名	国語	記入者名	菅野 宣衛 (所属：附属小学校)									
<p><今年度の実績></p> <ul style="list-style-type: none">・ 附属小学校・中学校の公開研究協議会に向けて，教材選定から教材分析，事前・事後検討会まで，ご指導いただきながら，授業作りを進めることができました。・ 小中で交流授業を実施したり，授業を相互に見合ったりすることで，連携や児童生徒の発達段階に応じた指導について相互理解を深めた。 <p><次年度に向けた予定・課題等></p> <ul style="list-style-type: none">・ 大学の国語科の先生方をお招きして，小学校，中学校で授業を行っていただく機会を設けたい。 <p><次年度の体制></p> <table><tr><td>部会長</td><td>大橋</td><td>純一</td></tr><tr><td>副部会長</td><td>佐藤</td><td>優子</td></tr><tr><td>書記</td><td>菅野</td><td>宣衛</td></tr></table>				部会長	大橋	純一	副部会長	佐藤	優子	書記	菅野	宣衛
部会長	大橋	純一										
副部会長	佐藤	優子										
書記	菅野	宣衛										

2014年度部会活動報告書

部会名	社会科	記入者名	佐藤 文知 (所属：附属小)
<p><今年度の実績></p> <p>1 公開研究協議会 に向けた取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小中とも公開研究協議会に向けて事前打ち合わせ・指導案検討を行った。 事前打ち合わせ 小学校：5月14日(水) 中学校：5月9日(金) 公開研究協議会 小学校：6月6日(金) 中学校：5月30日(金) <p>2 部会内での取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小学校：次年度の新研究主題に向けて、教科の特性を生かした研究テーマと重点について話し合い、見通しを立てた。(2月) ・中学校：授業を見合う会(12月：2年・1月：1年) 次年度研究をふまえた普段の授業を見合い、授業改善に生かす試みを行った。 <p>3 共同研究の取り組み</p> <p>秋田大学の社会科教育学研究室による授業づくり演習の一環として、「白神山地に迫る危機」をテーマにしたニホンジカの食害に関する授業実践を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小学校での実践：2月5日(木) 13:40～15:15(5年C組) ・中学校での実践：12月10日(水) 10:55～12:45(1年D組) <p>4 初等社会科での講義</p> <ul style="list-style-type: none"> ・将来教職を希望している学生に対し、社会科を学ぶ意義、社会科の授業の在り方について、2回にわたり講義を行った。 <p><次年度に向けた予定・課題等></p> <p>1 公開研究協議会に向けた打ち合わせ、指導案検討</p> <p>2 部会内での取り組み(小学校：部内研修会、中学校：授業を見合う会 など)</p> <p>3 授業づくり演習(学生による授業実践)</p> <p>小学校：2月頃(6年生、むのたけじ氏の平和学習に関する授業、2時間)</p> <p>中学校：7月上旬～下旬(3年生、むのたけじ氏の平和学習に関する授業、2時間)</p> <p>4 初等社会科での講義</p> <p><次年度の体制></p> <ul style="list-style-type: none"> ・部会長 外池 智先生(秋田大学) ・副部会長 佐藤 文知(附属小) ・書記 藤島 美子(附属中) 			

2014年度部会活動報告書

部会名	算数・数学	記入者名	原田潤一 (所属：英語理数教育講座)
<p><今年度の実績></p> <ul style="list-style-type: none">・小学生向け授業を附属中学校教員と共同で行った。内容は『トポロジと一筆書き』と『4次元ってなんだろう?』 <p><次年度に向けた予定・課題等></p> <p>予定</p> <ul style="list-style-type: none">・引き続き小学生向け授業を附属中学校教員と共同で行っていく。 <p>課題</p> <ul style="list-style-type: none">・小学生向け授業のテーマ決めなどの際に、附属中の先生に任せる部分が多かったので、次年度は大学教員側からも提案・意見を出していきたい。 <p><次年度の体制></p> <p>部会長 大内将也 副部会長 書記</p>			

2014年度部会活動報告書

部会名	理科	記入者名	石橋研一 (所属 教育文化学部)
<p><今年度の実績></p> <ul style="list-style-type: none"> ○公開研究協議会における研究協力及び指導助言 <ul style="list-style-type: none"> ・附属中→5月30日(金):川村教一 ・附属小→6月6日(金):石橋研一 ○相互乗り入れ授業における出前授業 <ul style="list-style-type: none"> ・附属中:附属小教員→2月24日(火)の予定 (佐々木 修, 高橋健一, 福田佳子, 清水 琢教諭)による授業 ・附属小:附属中教員→2月16日(月)に実施 (菊地智則, 真崎敦史教諭)による授業 ○大学と付属学校との連携の事業 <ul style="list-style-type: none"> ・秋田1受けたい理数の授業!→8月6日(水)午前中 ※会場:附属中学校 (秋田大学教育文化学部 学部・附属共同研究プロジェクト) 理科①:林 正彦准教授, 本谷 研准教授, 真崎敦史教諭 理科②:石井照久准教授, 河又邦彦准教授, 菊地智則教諭 ○大学と付属学校との連携授業 <ul style="list-style-type: none"> ・附属中→科学講座開講 <ul style="list-style-type: none"> 理科講座①→ 9月19日(金)川村教一教授 理科講座②→12月22日(月)林 正彦准教授 理科講座③→ 2月6日(金)石橋研一准教授 ・附属中:大学教員(石橋研一准教授)による授業 理科(中1対象):真崎敦史教諭とのティームティーチングで合計8時間 12月17日(水), 18日(木), 19日(金), 22日(月), 24日(水) <p><次年度に向けた予定・課題等></p> <ul style="list-style-type: none"> ○公開研究協議会 附属小:6月12日(金), 附属中:6月5日(金) ○大学と付属学校との連携授業 <ul style="list-style-type: none"> ・秋田大学教育文化学部 学部・附属共同研究プロジェクトは実施2年目 			

<次年度の体制>

- ・ 部会長 (岩田吉弘) 所属 (教育文化学部)
- ・ 副部会長 (佐々木修) 所属 (附属小学校)
- ・ 書記 (小松智子) 所属 (附属中学校)

2014年度部会活動報告書

部会名	音楽	記入者名	桂 博章 (所属 音楽教育研究室)
<p>＜今年度の実績＞</p> <p>①学部・研究科の教育の充実に向けた共同の取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 6月、7月にかけて、音楽教育研究室の爲我井壽一准教授が、附属小学校の合唱部の指導を、附属小学校の佐々木裕子教諭と共同で6回行い、合唱コンクールに向けて児童の演奏能力の向上を図る。 ・ 学生が実践的な指導力を身につけることを目的として、音楽研究室所属の学生、9名が、学部の授業において5年次の音楽の授業を計画し、2月12日（木）に2時間行った。題材は西馬音内盆踊りで、学生は事前に踊り、横笛、太鼓、地口^{じぐち}の実技能力を身につけ、授業計画も入念に練り上げたので、附属小学校の教諭によると、児童の感想も好意的なものであったとのことである。 <p>②公開研究協議会などに向けた取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 音楽教育研究室教員が附属小学校の公開研究会の事前の打ち合わせに参加し、題材、指導方法についての研究、打ち合わせを行う。 <p>③共同研究や共同授業などの取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 附属小学校の構内研修に、音楽教育研究室の教員が2度、参加し、学部と附属校とが共同して、教育内容・方法の改善を図った。 <p>＜次年度に向けた予定・課題等＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 来年度は、新任教員2名の専門性、能力を生かし、今年度よりも協力関係を深めていくように努める。 <p>＜次年度の体制＞</p> <p>部会長：吉沢恭子教授 副部会長：佐々木裕子教諭 書記：石原慎司講師</p>			

2014年度部会活動報告書

部会名	図画工作・美術	記入者名	進藤 亨 (所属：附属小学校)
<p><今年度の実績></p> <p>1. 学部・研究科の教育の充実に向けた共同の取り組み及び公開研究協議会などに向けた取り組みなど</p> <p>(1)附属小学校</p> <p>公開研究会では、長瀬先生から、題材のもつ価値、子どもにつけるべき力、指導上の留意点など、授業を行う際のさまざまな点について、専門的な助言を受けた。また、授業者の悩みについて、丁寧に相談にのっていただいた。授業後に、題材や指導について、「対話」の視点からの的確な助言をいただいた。</p> <p>また、部内研究会の授業後の検討会では、図画工作の授業を通しての「対話」についての指導助言をいただいた。次年度の附属小学校の研究推進の見通しをもつことができた。</p> <p>なお、平成27年2月12日に行われた第4回校内研修会では、図画工作部が三浦先生と進藤先生が提案授業を提示し、更に授業検討会が行われた。図画工作部は「対話」が文字や音声の言語だけではなく、視覚言語や造形言語、つまり形や色彩、材料、光などによっても行われるなどの見解を示した。また、「対話」による「新たな価値」は、子どもの内部にも存在するという見解も示した。</p> <p>(2)附属中学校</p> <p>授業づくりの段階から笠原先生の指導を受けた。題材の構想や本時の展開のみならず、ねらいや生徒の実態に適した素材についての指導を受けたり、参考作品を貸していただいたりした。</p> <p>2. 共同研究や共同授業などの取り組みなど</p> <p>附属小学校教諭が附属中学校の1年生に「クロッキー」の授業を行い、附属中学校教諭が附属小学校の1年生に「プラ版工作」の授業を行った。</p> <p>小学校教諭が中学校1年生に対して授業を行う際、また、中学校教諭が小学校1年生に対して授業を行う際、どのような点に留意すれば児童、生徒の意欲を引き出すことができるのかを課題に授業を行った。</p> <p>「クロッキー」の授業では、うまく形をとらせるためのポイントを提示すること、「プラ版工作」では、普段扱うことがない素材を使うことを手立てとした。いずれの授業でも、児童、生徒の意欲的な取り組みが見られた。</p>			

3. 学外の研究・研修団体などに関わる取り組み

「第51回全国高等学校美術、工芸教育研究全国大会」の「2014秋田大会」に笠原と長瀬が参加した。更に、秋田大学教育文化学部学校教育課程美術研究室の学生が、会場準備及び分科会運営スタッフとして参加した。

この大会で学生は、高等学校における授業が、作品制作だけを目指すのではなく、人間形成の視点などで行われていることを理解できた。合わせて、バランスのとれたカリキュラムが重要であることなども理解することができた。

<次年度に向けた予定・課題等>

小学校、中学校共に公開研究会に向けて、授業づくりの段階からかかわり、互いにアドバイスし合う。また、研究協力者と授業者が密に連絡をとり合い、専門的な指導助言をもらい、教材観や指導観、研究テーマを深めていく。

<次年度の体制>

部会長 笠原幸生 先生
副部会長 長瀬達也 先生
書記 進藤亨 (附属小学校)

2014年度部会活動報告書

部会名	体育・保健体育	記入者名	松本 奈緒 (所属 秋田大学)
<p><今年度の実績></p> <p>1. 公開研究協議会への協力</p> <p>1) 附属中学校公開研究協議会 (5月)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 体づくり運動「仲間と共に高め合い、運動の特性に応じた楽しみを味わう力を育む指導～共に考え、励まし合いながら、学びを深める授業づくり (3年生対象)」授業者：佐々木勝利、共同研究者：松本奈緒 <p>2) 附属小学校公開研究協議会 (6月)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 体づくり運動「わくわくどきどきぼうけんじま～からだづくりうんどう～ (1年生対象)」授業者：三浦大介、共同研究者：松本奈緒 ・ ボール運動「動いてつないでみんなでシュート！～ハンドシュートボール～ (5年生対象)」授業者：柴田優樹、共同研究者：佐藤靖 <p>2. 研究協力</p> <p>1) ハンドボールの実践研究協力 大学：佐藤靖、附小：柴田優樹 (6月)</p> <p>2) ムーブメント教育の実践研究協力 大学：松本奈緒、附小：柴田優樹 (1月末～2月上旬)</p> <p>3. 大学における教員養成機能充実に向けての取り組み</p> <p>1) 附属中学校教員の大学授業 (保健体育科教育学概論Ⅱ・保健体育科教育学)への召喚 (7月)「保健体育教諭の仕事について」講義担当者：松本奈緒、外部講師：佐々木勝利</p> <p>4. 地域との連携</p> <p>1) 附属小学校の公開研究協議会を全県体育研究会への提案も含めて行った。結果、参加者が増加した。</p> <p><次年度に向けた予定・課題等></p> <p>予定</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 附属中学校教員の大学授業 (保健体育科教育学概論Ⅱ・保健体育科教育学)への召喚 ・ ムーブメント教育の実践研究協力 (附属小) ・ 公開研究協議会については、内容が決まり次第連絡する。 			

課題

- ・ムーブメント教育の実践研究協力については、インフルエンザ流行期で学年閉鎖にあたってしまった為、実施時期の検討が必要では（授業実施者より）。
- ・附属小学校の公開研究協議会を全県体育研究会への提案を含めて行ったのは成功したが、同様に参加が増える工夫がないのか考えている。
- ・特別支援学校の方から今年度はバドミントンラケットを借りられて良かったが、それぞれの学校の備品等があって何が借りられるか分かればありがたいという提案があった。⇒備品リストを作成し、共有する。実際に使用できるかどうかは、体育活動の実施状況や承認の問題もあるので個別に考慮・対応する。

<次年度の体制>

部会長 松本奈緒（大学）

副部会長 佐々木勝利（附属中）

書記 三浦大介（附属小）

2014年度部会活動報告書

部会名	英語部会	記入者名	若宥保彦 (所属 教育文化学部)
<p><今年度の実績></p> <p>①学部・研究科の教育の充実に向けた共同の取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教育実習における附属中での一日実習 ・大学院生による中学校での授業 英語科教材開発論で作成した教材を使用しての中学校での授業 (3月12日及び13日) <p>②公開研究協議会などに向けた取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大学教員と中学校英語担当教員または小学校外国語活動担当教員との打ち合わせ及び大学教員による事前の授業参観 <p>③共同研究や共同授業などの取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小学校においては9月末のオープン研修会での研究協力 ・中学校においては2月下旬の「授業をみあう会」での授業参観及びコメント <p>④学外の研究・研修団体などに関わる取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> ・11月上旬の全英連秋田大会への参加、協力 <p>⑤部会の組織、運営などに関する取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特になし <p>⑥その他の取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特になし <p><次年度に向けた予定・課題等></p> <p>①について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業指導案等の作成に関して、実習前にフォーマット等をきちんと理解させ、実習の際の作成がスムーズに行えるようにしておく必要がある ・今年度同様、大学院の授業の一環として中学校や小学校での授業を行うことを通じて授業や教材準備のスキルアップを行う <p>②について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「授業をみあう会」で出た課題や、昨年の公開研の課題を春休み中に確認し、4月から課題研究にスムーズに取り組めるようにしてはどうか <p>③について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・②とも関連するが、公開研のテーマとオープン研修会のテーマの関連づけをどうするか。年度前にある程度行っておくことで一貫した取り組みができるのではないか。 <p>④について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・現段階では特に予定なし 			

⑤について

- ・学部改組により今年度から英語教育コースが発足し、英語教育関係の教員が増えた。来年度以降参加者を増やすための呼びかけを行いたい。

⑥について

- ・佐々木雅子先生から、Can-Doリスト形式による授業到達目標について、小中一貫したものを作成しホームページ等で公開してはどうかとの提案があった。現段階では小学校では鈴木副校長先生が行っている。また、中学校では須田先生が10年研の一環として作成したものがある。今後、2つのリストの摺合せを行う必要がある。来年度中または再来年度の公開を目指した取り組みを進めてはどうか。

<次年度の体制>

部会長 佐々木雅子

副部会長 須田真

書記 若有保彦

2014年度部会活動報告書

部会名	技術家庭科	記入者名	佐々木信子 (所属：家庭科教育学講座)
<p><今年度の実績></p> <p>○公開研究会は、小学校・中学校ともに研究の3年目としてそれぞれの研究主題に迫る取り組みができた。公開授業では、小学校6年生で「工夫しよう1食分の食事」を題材に“「対話」を通して思考を深める授業づくり”を、中学校2年生では「私たちと衣服」を題材にして、“多様化する社会における学びの展開”にふさわしい授業が行われた。</p> <p>○11月に秋田市で開催された全国小学校家庭科教育研究会秋田大会では、附属小学校6年生の「わたしとわたしの家族」の授業が公開され、全国の多くの参観者から高い評価を得た。</p> <p>○3学期には、学校間の連携・交流を深めるために合同授業を実施した。</p> <p>○教育実習生の受け入れについては、特に大きな問題等もなくスムーズに行われた。視聴覚教材等を工夫するなど、熱心に取り組む様子が見られた。</p> <p><次年度に向けた予定・課題等></p> <p>○公開研究会は3年計画の1年目にあたるため、研究主題を踏まえ社会との接点をもったテーマや題材を検討し、質の高い授業づくりに取り組む。</p> <p>○小・中学校の連携については、今後も継続していく。</p> <p>○中学校では、平成27年度の全県技術・家庭科研究大会や平成29年度の全国技術・家庭科研究大会に向けた準備を進めていく。技術は「ものづくり」を、家庭は「食生活」をテーマに斬新な授業を検討する。</p> <p>○教育実習生の事前指導では、学生が自由な題材を設定し独創性のある授業を提案できるよう、視聴覚機器の活用や体験的な学習を取り入れた教材づくりを指導する。</p> <p><次年度の体制></p> <p>部会長 佐々木信子 (教科教育講座)</p> <p>副部会長 近藤 史子 (附属中学校)</p> <p>書記 加藤 緑 (附属小学校)</p>			

2014年度部会活動報告書

部会名	総合部会	記入者名	中野 良樹 (所属 こども発達講座)
<p>総合部会は、小中の総合学習、小学校生活科、幼稚園の遊びの指導、特別支援の生活単元学習が含まれる。以下に本部会の参加者を記載する。(敬称略、()内は所属)</p> <p>中野良樹 (学部)、鈴木聡 (小)、嶋崎裕子 (小)、高野哲 (特支)、島津真奈美 (特支)、中野貴洋 (特支)、斎藤明 (特支)、高橋基裕 (特支)、斎藤里香 (特支)、渡辺舞子 (特支)、高橋るみ (特支)、坂根瞳 (特支)、櫻田佳枝 (特支)、中村堅一 (特支)、泉薫 (特支)</p> <p><今年度の実績></p> <p>小学校生活科</p> <p>6月に開催された公開研究授業において、1年B組と2年B組の生活科を提案授業とした。学部教員が毎週両クラスの授業を参観し、検討会において助言指導を行った。また11月の部内研究会においては、1年B組に幼稚園の教員がTTとして参加し、研究授業を行った。また、学部の生活科概論の授業では、附属小学校の鈴木教諭が1時間の授業を担当した。</p> <p>特別支援学校小学部</p> <p>学部との連携として大学教員が訪問し、社会性に関する講義を行った。また、公開研究授業では生活単元学習として雪遊びを行った。また、他校園との交流事業として、小学校1、2年生や幼稚園を訪問し、餅つき、発表会、焼き芋パーティなどを通して園児、児童らと交流した。中学年クラスでは附小4年生の児童をお祭りに招待し、交流を図った。高学年では、秋と冬の2回にわたり、附小5年B組を訪問し児童企画によるゲームを楽しんだり、特別支援の児童がお礼にクラスに招待したりなどの交流を行った。</p> <p>特別支援学校中学部</p> <p>大学との連携として、秋田大学に所属するALT教員が派遣され授業に参加したり、大学竿燈会との交流を行った。また、大学において生徒たちが制作した作業製品を販売し、また、中学校とは総合的学習のDOVEにおいて相互交流を図った。</p> <p><次年度に向けた予定・課題等></p> <p>小学校においては、例年通り公開研究会における提案授業と部内研を企画し、大学との連携、幼稚園との共同授業を図る予定です。特別支援学校では来年度も中学校の総合学習DOVE FESTAへの参加が決まっている。</p>			

<次年度の体制>

部会長 中野良樹（こども発達講座）

副部会長 斎藤明（特別支援学校）

書記 鈴木聡（附属小学校）

2014年度部会活動報告書

部会名	特別活動	記入者名	齋藤嘉余子(所属：附属中学校) 石田智之(所属：附属小学校)
<p><今年度の実績:附中></p> <p>※申し合わせでは以下に触れることが望ましいとされています。</p> <p>①学部・研究科の教育の充実にに向けた共同の取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> ●教育実習事前事後指導 <ul style="list-style-type: none"> 6/5, 7/3…指導要領についてと指導案の書き方についての講義・演習 ②公開研究協議会などに向けた取り組み <ul style="list-style-type: none"> ●題材名「生きがいについて考えよう」 <ul style="list-style-type: none"> 5/9 公開研指導案事前検討会 5/30 公開研究協議会【授業及び協議会】 ●題材名「誰かのために私ができること」 <ul style="list-style-type: none"> 10/29 秋季校内研指導案検討会 11/6 秋季校内研修会【授業及び協議会】 ③共同研究や共同授業などの取り組み <ul style="list-style-type: none"> ●「人生の樹」の活用に関わる共同研究 <ul style="list-style-type: none"> 10～12月…1, 2年生全学級（8クラス）にて「人生の樹」にかかわる授業を実施 <p><今年度の実績:附小></p> <p>②公開研究協議会などに向けた取り組み 公開研究会ではないが、本校オープン研究会での学級活動に向けて森先生よりご助言・ご指導をいただいた。また、本校研究紀要にもご執筆をいただいた。</p> <p>④学外の研究・研修団体などに関わる取り組み 本校オープン研修会（特別活動）は、秋田市の特別活動研究会との共催の形となり、秋田市内各校の先生方も参観した。</p> <p><次年度に向けた予定・課題等:附中></p> <p>①学部・研究科の教育の充実にに向けた共同の取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> ●教育実習事前事後指導 <ul style="list-style-type: none"> 指導要領についてと指導案の書き方についての講義・演習 ②公開研究協議会などに向けた取り組み <ul style="list-style-type: none"> ●公開研指導案事前検討会 ●公開研究協議会【授業及び協議会】 ●秋季校内研指導案検討会 ●秋季校内研修会【授業及び協議会】 ③共同研究や共同授業などの取り組み <ul style="list-style-type: none"> ●「人生の樹」の活用に関わる共同研究 <ul style="list-style-type: none"> 4～12月 2, 3年生徒を対象に「人生の樹」を活用した授業を実施、成果を分析 			

<次年度に向けた予定・課題等：附小>

・今年度同様，特別活動は公開研究会では行わず，オープン研修会での授業研究を予定している。

・新研究主題一年次となるため，新たな重点に沿った研究を共同で行う必要がある。

<次年度の体制>

部会長 森和彦

副部会長 斎藤嘉余子

書記 石田智之

2014年度部会活動報告書

部会名	情報教育部会	記入者名	浦野弘 (所属 教育文化学部)
<p>1. <今年度の実績></p> <p>① 姫野先生の講座で「ネットの危険性やモラル等の指導について、学生が教材や資料を作成する」という活動があり、その資料がデータとして特別支援学校に送信された。実践しようとして試みたが、内容が特別支援の児童・生徒にとっては高度だったため、まだ、実現できないという状況である。</p> <p>小・中学校でなくは、対応可能かもしれないので、今後、それらについて検討していくことにしている。</p> <p>② 小学校では5年生がPTA授業参観に合わせて、県庁の出前講座を行った。保護者・児童そろって、ネットの危険性やモラル、マナーについて考える機会をもつことで、トラブル回避に役立てることができるといような感想があった。可能であれば、次年度以降の実施も考えている。</p> <p>2. 次年度に向けた予定・課題等</p> <p>① しっかりとメンバーが集まる方法について、再度検討をする。</p> <p>② 大学側でとりまとめた情報があれば、今後、話題が広がり、内容も深まる。</p> <p>例えば、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・4校園で発生したネット関係のトラブルの事例検討 ・またその対応策についての検討 ・タブレット端末のソフトやアプリ等で学習に使えるものに関する情報や現状についての学習会 <p>等を視野に入れて、来年度は検討することとした。</p> <p><次年度の体制></p> <p>部会長 未定</p> <p>副部会長</p> <p>書記</p>			

2014年度部会活動報告書

部会名	学校経営	記入者名	佐藤修司 (こども発達・特別支援講座)
<p><今年度の実績></p> <p>部会としての活動よりは、附属学校運営会議等としての取り組みとなるが</p> <p>○附属学校経営委員会を設置し、校園長代表が委員長、その他の校園長2名が副委員長となり、また、附属学校学部共同委員会の改組し、校園長代表が委員長、その他の校園長1名が副委員長となって、副委員長計3名が、年度計画の四つの事項を分担する体制とした。このことで、附属学校園の連携・共同がより円滑に行われるようになった。</p> <p>○校園長代表が学部執行部の一員となり、スタッフ会議に出席することにより、附属学校園と学部との連携が一層深まった。</p> <p>○附属学校共同委員会による、学部・附属の合同研修会が例年と同様に開催され、各校園で取り組まれている、個に応じた指導に関わる情報の共有、認識の共有が図られた。</p> <p>○附属学校子どもの人権委員会を設置し、1回開催した。保護者代表、学部の関連教員（法律学、臨床心理学、教育学・教育心理学）の参加により、附属学校園の子どもの人権の関わる協議を深めることができた。</p> <p><次年度に向けた予定・課題等></p> <p>部会としての活動はほとんどできなかった。教職大学院の平成28年度設置に向けて、学部・大学院と附属学校園との関係も、不断に見直していく必要があることから、このことについての調査研究も必要である。</p> <p>また、昨年度、公開研究協議会等に関するアンケートを、秋田市内の公立小中学校の管理職、及び主任レベルの教員に対して行ったところであるが、具体的な改善策をとりまとめ、実施するところまでに至らなかった。この点も課題として残された。</p> <p>附属学校地域連携協議会、や秋田県教委、秋田市教委との連絡会についても、今年度は教職大学院設置に向けた準備もあって、十分に行うことができなかった。次年度からは、附属学校経営委員会の担当副委員長が適切に担当する形としていくことが望まれる。</p>			

< 次年度の体制 >

部会長：佐藤修司

副部会長：田仲誠祐

書記：原 義彦

2014年度部会活動報告書

部会名	幼稚園	記入者名	山名 裕子 (所属：こども発達・特別支援講座)
-----	-----	------	----------------------------

<今年度の実績>

1. 附属教員の学部での授業

No.	授業名	実施日	担当者
1	教職入門	5月7日(水)	安達竜彦
2	教育実習 事前事後指導ⅠB	6月19日(木)	安達竜彦・佐藤菜穂子
		7月24日(木)	佐藤菜穂子
		11月20日(木)	安達竜彦・佐藤菜穂子
3	教育実習 事前事後指導ⅡB	6月19日(木)	白木裕美・菊地彩子・長野一枝
		7月24日(木)	白木裕美・菊地彩子・長野一枝
		11月20日(木)	白木裕美・菊地彩子・長野一枝
4	幼児の理解と指導	6月4日(水)	中村知江子
5	生活科教育学概論	1月20日(火)	佐藤菜穂子

2. 附属学校園教員と大学教員との共同研究

大学教員の保育観察・記録 ～原則として2名の教員がそれぞれ週1回

(1) 教員の共同研究を目的とする保育観察・記録

- ① テーマ1：遊びの充実を目指して(附属幼稚園研究テーマ)
- ② テーマ2：遊びを中心とする保育を考える
- ③ テーマ3：3年保育の教育課程の再検討(学部・附属教員の共同による教育実践研究支援プロジェクト)
- ④ テーマ4：「子どもの論理的思考と直観的思考に関する発達的研究：数量概念と想像的世界の認識の関連」(科学研究費補助金 基盤研究(C) 平成24年度～26年度：山名裕子)
- ⑤ テーマ5：幼稚園教育における『集団』の意味(奥山順子)

(2) 附属幼稚園との共同研究の基盤となる関係作り

- ① 日常的な保育実践の理解と相互の信頼関係の構築 参与観察・保育参加
- ② 附属幼稚園ホームページの作成
「ひとこと日記」(大学教員の幼稚園参観日誌)の随時掲載(3回)奥山順子
- ③ 大学における保育講座(秋田乳幼児保育研究会)への附属教員の参加(6回) ④ 大学教員からの研究情報の提供
 - ・研究会報の発行 『秋田乳幼児研究会報 第7号, 2015年3月』の発行予定
 - ・「研究たより」の発行 No.48～53.

(3) 保育実践研究・保育カンファレンス

学部教員の研究保育・園内研究会等への参加

No.	実施日	内 容	参加者	備 考
1	5月13日(火)	5歳児(うみ組) 保育研究会	奥山順子	参観・研究会への参加
2	5月20日(火)	4歳児(やま組) 保育研究会	奥山順子	参観・研究会への参加
3	6月9日(月)	3歳児(はな組) 保育研究会	奥山順子・瀬尾知子	参観・研究会への参加
4	5月22日(木)	公開研究会打合せ 研究打合せ	奥山順子・山名裕子・瀬尾知子	研究打合せ
5	6月20日(金)	公開研究会打合せ 研究打合せ	奥山順子・山名裕子	研究打合せ
6	6月27日(金)	公開研究会	奥山順子・山名裕子・瀬尾知子	参加・コメンテーター
7	7月11日(金)	3歳児(はな組) 遊びを語る会	奥山順子・瀬尾知子	参観・研究会への参加
8	7月16日(水)	5歳児(うみ組) 遊びを語る会	奥山順子	参観・研究会への参加
9	8月20日(水)	保育研修会「乳幼児期はなぜ「保育」なのか」	奥山順子・山名裕子・瀬尾知子	研修会講師(園外からの参加者もあり) 研修会への参加
10	10月1日(水)	オープン研究会 打合せ	奥山順子・山名裕子	研究打合せ
11	10月10日(金)	オープン研究会	奥山順子・山名裕子・瀬尾知子	参加・コメンテーター
12	11月20日(木)	3歳児(はな組) 遊びを語る会	奥山順子・山名裕子	参観・研究会への参加
13	11月25日(火)	4歳児(やま組) 遊びを語る会	奥山順子	参観・研究会への参加
14	11月28日(金)	幼小TT授業	山名裕子	幼稚園教員の授業参加の参観
15	12月2日(火)	4歳児(ほし組) 遊びを語る会	奥山順子・山名裕子	参観・研究会への参加
16	12月5日(金)	5歳児(うみ組) 遊びを語る会	奥山順子・山名裕子・瀬尾知子	参観・研究会への参加
17	2月3日(火)	附小・体験入学	山名裕子・瀬尾知子	参観
18	2月9日(月)	幼小相互乗り入れ授業、合同研究会	奥山順子・山名裕子	研究会でのコメント
19	2月13日(火)	園内研究会「3歳児の保育と教育課程」	奥山順子・山名裕子・瀬尾知子	研究会講師・研究会への参加

(4) 教育実習事後指導を通して

大学教員が事後指導において学生の保育記録をもとにしたカンファレンスを実施
記録を練り直し、再考察をまとめたものを編集して冊子として作成。

附属教員への記録のフィードバック。

幼稚園教育実習の記録『たまご』第12号（2014年12月発行）

(5) 附属幼稚園 研究紀要への寄稿

① 秋田大学教育文化学部附属幼稚園・平成24年度研究紀要（平成26年6月発行）

奥山順子 「幼児と保育者の関係性」を考えるために～記録することとかわ
わること～ pp.107-115.

② 附属各教員の実践報告事例レポート作成の支援（奥山順子）

3. 附属4校園の保育参観・交流

(1) 附属小学校

① 1年生と5歳児の交流「なかよしタイム」（5月16日, 8/28, 12/9, 2/6）

② 1年生と5歳児の交流「やきいもをたべよう」（11月5日）

(2) 附属特別支援学校

① 高等部と5歳児のサツマイモ苗植え交流（5月12日）

② 全児童生徒と全園児の「竿燈交流」（7月7日）

③ 小学部ふたば学級と交流（10/30, 11/7）

④ 小学部ふたば学級と全園児の「おもちつき交流」（12月11日）

(3) 附属中学校

附中1年生職場体験（12/2, 3）

4. 授業等での参観

(1) 大学院科目

① 幼児教育実践論における観察・記録とカンファレンス演習（11月27日）

(2) 卒業研究における観察

① テーマ：「幼児の生活と行事のつながり－運動会に向かう子どもの姿から－」

② テーマ：「幼児期の「遊び」の中に見られる「学び」の過程－砂場で遊ぶ
幼児の姿に着目して－」

③ テーマ：「保育における「生活」と「遊び」のつながり－片付け場面の幼児
にとっての意味に着目して－」

<次年度に向けた予定・課題等>

1. 大学教員の継続的な参与観察とそれを生かした研究推進
 - (1) 26年度同様に、学部・附属幼稚園が連携，協力してそれぞれの立場で研究を進め，保育・研究双方の充実を図る。
 - (2) 双方の主体性が発揮できる対等な関係での共同研究体制の模索。

2. 附属教員の学部での授業
 - (1) 教職入門
 - (2) 教育実習事前事後指導ⅠB，ⅡB
 - (3) 幼児の理解と指導
 - (4) 生活科教育学概論

3. 附属学校園教員と大学教員との共同研究
 - (1) 教員の共同研究を目的とする保育観察・記録
 - (2) 附属幼稚園との共同研究の基盤となる関係作り
日常的な保育実践の理解と相互の信頼関係の構築
 - (3) 学部教員の研究保育・園内研究会・保育カンファレンスへの参加
 - (4) 教育実習事後指導を通して

4. 大学教員の附属学校園の公開研究協議会などへの参加

2014年度部会活動報告書

部会名	小学校部会	記入者名	鈴木 了 (所属：附属小学校)
<p>＜今年度の実績＞</p> <p>① 部・研究科の教育の充実に向けた共同の取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 学部の教育実習主免Ⅰ期，副免における実習生を受け入れ，事前指導から評価に至るまでの一連の指導に当たった。 ・ 国語科と社会科において，院生の授業実践の場を提供した。 <p>② 公開研究協議会などに向けた取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 各教科部等において，研究協力者を依頼した学部教員との共同研究を進め，複数回にわたる指導案等の事前検討会，当日の授業提示，県内外からの参会者との協議会等を通して，研究を深め，成果を発信した。また，多くの学部生や院生の参加を得て，学生教育の充実の一端を担った。 <p>③ 共同研究や共同授業などの取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 今年度は算数科や体育科において活発な共同研究が実践され，成果をあげた。 <p>④ 学外の研究・研修団体などに関わる取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 全国小学校家庭科研究大会秋田大会授業者（加藤緑教諭） ・ 秋田市教育研究会特別活動部会主催全市一斉授業研修会会場校・授業者（佐藤文知教諭） ・ 秋田県国語教育研究会事務局（中村玉緒教諭） <p>⑤ 部会の組織、運営などに関する取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 活動の主体である研究委員会に委員長を補佐する副委員長を2名置き，体制の強化を図った。 <p>⑥ その他の取り組み</p> <p>＜団体研究＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ パナソニック教育財団実践研究助成一般助成校 ・ N I E実践指定校 <p>＜個人研究＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 秋田県教育公務員弘済会教育研究助成（高橋健一教諭） ・ 第23回上廣道徳教育賞入賞（堀井綾子教諭） ・ 寄稿・明治図書月刊「国語教育」3回連載（熊谷尚教諭） <p>＜次年度に向けた予定・課題等＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 新たな研究「仲間と共につくる豊かな学びⅡ ～新たな価値を創造する『対話』を目指して～」の1年次であり，新しいメンバーで各教科等の研究体制を強化するとともに，学部・研究科との共同研究を核として研究を深める。 			

< 次年度の体制 >

部会長	小学校校長
副部会長	同 副校長
書記	同 教頭

2014年度部会活動報告書

部会名	中学校部会	記入者名	田仲 誠祐 (所属 附属中学校)
<p><今年度の実績></p> <p>I 学部・研究科の教育の充実に向けた共同の取り組み</p> <p>○ 理数教育プロジェクトに基づく取組</p> <p> [秋田一面白い理数授業]</p> <p> 夏休み小学生を対象に、大学教員と中学校教諭が協力して授業を行った。受入予定人数である80名の参加があり好評であった。</p> <p> [放課後理数講座]</p> <p> 中学生を対象に放課後（7時間目）に大学教員を招いて専門的な授業をしていただいた。年間8回実施（大学教員6回、附属教員2回）。平均参加者は約30名。</p> <p>○ 国際理解プロジェクトに基づく取組</p> <p> [インターナショナルディ]</p> <p> 附属中学校の国際交流室が実施するインターナショナルディ（海外からの留学生と交流する企画）を、中学校だけでなく小学校、特別支援学校でも開催した。</p> <p>II 公開研究協議会などに向けた取り組み</p> <p> 学部教員に各教科、道徳、特別活動の共同研究者を委嘱し、指導案の作成段階から密接に連絡を取り合い授業づくりを進めることができた。また、研究のまとめでも共同研究者から寄稿いただき、次年度への研究に役立てた。</p> <p>III 共同研究や共同授業などの取り組み</p> <p>○ 共同研究</p> <p> 「フックの法則の指導に関する実験装置の工夫と授業実践」</p> <p> 協同研究 秋田大学 石橋研一 浦野弘 本校理科部</p> <p> 「人生の樹を活用したキャリア教育の可能性について」</p> <p> 秋田大学教育実践研究支援センターの研究プロジェクト 本校特別活動部</p> <p> 「国立大学附属中学校における学校支援組織の基本設計に関する考察</p> <p> — 鳩翔サポートセンターの設立 — 」</p> <p> 秋田大学 神居 隆 附属中学校 田仲 誠祐</p> <p>○ 授業研究</p> <p> [授業を見合う会] 1～2月に本校全職員が一人一授業を提案する「授業を見合う会」を実施した。実施計画と案内を中学校部会員に送付し参加を呼びかけたところ、国語科、数学科等の授業に、学部教員だけでなく留学生や大学院生、学生など多数の参加があり充実した授業研究を行うことができた。</p>			

○ 研修会

〔小玉重夫先生の研修会〕 東京大学大学院教育学研究科教授の小玉重夫氏（附属中学校29期生）を講師として、校内及び中学校部会の合同研修会を実施した。

IV 学外の研究・研修団体などに関わる取り組み

- ・ 日本国語教育学会 第77回国語教育全国大会中学校部会言語生活発表
佐藤優子（国語）
- ・ 「技術科の授業開発のコミュニティの構築とその効果」（秋大教育実践研究紀要第36号）
花田守，本多満正（鹿児島大），菅家久貴，佐々木純
秋山政樹，井上正，海沼秀一，茂木達彦
- ・ 「時間枠付配送計画問題における中学生の思考傾向に関する一考察」
（秋大教育実践研究紀要第37号応募）
秋山政樹，花田守，本多満正，佐々木純，菅家久貴
- ・ 共同授業 題材名「コンピュータの利用の意義と評価」 H26. 10/31
秋山政樹教諭，本多満正教授等との研究実践を本校2年A組で実践
- ・ H27年度科学研究費助成事業応募「タブレット端末の利潤シミュレートで生産計画能力を育む中学校技術ゲームの授業開発」 花田守
- ・ 技家研県研究部「基礎・基本習得状況調査」の問題作成と調査及び結果の分析
近藤史子（家庭）
- ・ 秋田県算数・数学教育研究会事務局（本校数学科）
- ・ 秋田県国語教育学会事務局（本校国語科）

<次年度に向けた予定・課題等>

- 理数教育充実プロジェクトにおいて、大学教員と附属学校教員の協働で授業づくりを行ったことは、各方面からの反響が大きく、大きな成果を上げることができた。次年度はその充実発展とともに、国際理解教育推進プロジェクトにおいても、学部と附属の連携を進めていきたい。
- 「附中飛翔プロジェクト」の推進のために設置した、「鳩翔サポートセンター」の充実と効果的な活用を図りたい。附属中学校だけでなく、附属学校園での活用，できれば学部での活用にまで広げたい。
- 学部，附属教員の共同研究が進んできており，論文の共同執筆も増えてきた。この点でも充実・発展を図っていきたい。

<次年度の体制>

部会長 附属中学校校長

副部会長 同 副校長

書記 同 教頭

2014年度部会活動報告書

部会名	特別支援学校	記入者名	内海 淳 (所属：秋田大学) 新目 基 (所属：特別支援学校)
<p><今年度の実績></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 附属特別支援学校公開研究会において、今野和夫 (小学部)、斎藤孝 (中学部)、藤井慶博 (高等部) の3名が助言者を担当した。 ・ 附属特別支援学校の公開研究会事前研修会に関して、山名裕子先生が小学部の講師を担当した。 ・ 2月26日に附属特別支援学校全校研修会を開催し、「個別の教育支援計画の現状と課題」というタイトルで藤井慶博先生及び内海淳先生に講師をお願いした。なお藤井先生による附属教員の「個別の教育支援計画」に関する意識調査を実施した。 ・ 附属の副校長を含む3名により民間保育団体研究会の講師を担当した。 ・ 学部の授業に高等部主事・進路指導主事が参加した。 <p><次年度に向けた予定・課題等></p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 予定 <ul style="list-style-type: none"> ・ 公開研究協議会にむけた授業研究会及び当日の指導助言 ・ 配慮を要する幼児児童生徒への校内体制及び支援に関する研修会及び協議会の開催 ○ 課題 <ul style="list-style-type: none"> ・ 特別支援教育部会が本校中心であるため、他校園に呼びかけての部会の開催ができなかった。そのため他校園の特別支援教育に係る諸課題を共有するためにも、今年度発足した四校園コーディネーター連絡会と連携し、大学教員の指導をいただきながら、次年度は部会を進めて行きたい。 <p><次年度の体制></p> <p>部会長 内海 淳(校 長)</p> <p>副部会長 新目 基(副校長)</p> <p>書記 伊藤栄子(教 頭)</p>			

平成26年度

秋田大学教育文化学部附属学校学部共同専門委員会 実践報告書

発行 平成27年3月31日

編集 秋田大学教育文化学部附属学校学部共同専門委員会

発行者 秋田大学教育文化学部
〒010-8502 秋田市手形学園町1番1号